

コミュニティ研究会（第4回）
議事録

復興庁 福島県避難地域復興局

コミュニティ研究会（第4回） 議事次第

日 時：平成 25 年 11 月 6 日（水）13:30～

場 所：杉妻会館 4 階洋大会議室牡丹 A ホール

1. 開会

2. 議題

（1）有識者からの話題提供

- ・稲垣文彦氏

（公益社団法人中越防災安全推進機構復興デザインセンター長
なごか市民協働センター長）

～中越地震からのコミュニティ再生の取組～

- ・藤浩志氏

（十和田現代美術館副館長）

（2）意見交換

3. 閉会

○司会 それでは、時間となりましたので、第4回「コミュニティ研究会」を始めさせていただきます。

まず、お手元の資料の確認をさせていただきたいと思います。お手元に本日お配りしております資料ですが、第4回コミュニティ研究会議事次第というものを頭に、出席者名簿、中越地震からのコミュニティ再生の取り組みというのが稲垣さんの資料。右上にガバナンスの10月号と書かれた雑誌のコピー。新潟日報の記事の切り抜きの資料。あと、藤さんの資料として十和田奥入瀬芸術祭、緑色のパンフレット。あと、部室募集と書かれたパンフレット。最後に長期避難者の生活拠点形成のためのコミュニティ研究会の今後の進め方という資料をお配りしております。

お手元に不足する方がいらっしゃいましたらお知らせください。よろしいでしょうか。

それでは、本日の議題に入っていきたいと思います。本日は生活拠点周辺での交流施策、イベント施策等をテーマといたしまして、有識者の方から話題提供いただくとともに、意見交換をしていきたいと思っております。

それでは、有識者のほうを簡単に御紹介したいと思います。本日は2名の方にお越しただいております。

公益社団法人中越防災安全推進機構復興デザインセンター長の稲垣文彦氏。

十和田現代美術館副館長の藤浩志さんにお越しいただきました。

それでは、早速ですが、稲垣さんから話題提供をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

○稲垣氏 それでは、パソコンを使って御説明をさせていただきたいと思います。

御紹介いただきました稲垣でございます。どうぞよろしくお願いしたいと思います。

今日はお招きいただきまして、生活拠点周辺でのイベント交流施策ということでございますけれども、実は今回の趣旨にどこまで沿えるかというのは心もとない部分があるのですが、その点は御容赦いただきながら、私からは中越地震のコミュニティ再生の取り組みというところで御案内をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

今日のパワーポイントは皆さん方にお配りしておりますけれども、写真を追加しておりますので順番が変わっている部分がありますので、御容赦いただきたいと思います。

30分ぐらいのお時間を頂戴しまして、お話をさせていただきたいと思います。

自己紹介のほうはごらんいただければと思うのですがけれども、私は有識者なんて言われる立場ではございません。ずっと現場でやってきた人間でございます。実は震災前までは普通のサラリーマンをやっていた人間でございます。それが震災のきっかけで人生が変わりまして、一番最初は長島先生ですけれども、村長に会ったところから、あの辺から人生が間違っただけ感じがするのですが、山古志村のお手伝いをさせていただきながら、現在は中越地震の復興まちづくり、特に地域復興支援員という制度を設置していますので、これの人材育成をさせていただいている立場でございます。それから、あと、東日本では実は

今日、久しぶりにお会いする方が多かったのですけれども、総務省で設置しました復興支援員制度の関係のお手伝いをさせていただいたりとか、福島県の方々には実は大変お世話になっていまして、震災直後からビックパレットのほうで2カ月ぐらいずっとおりました。そこで県庁の皆さんにも大変お世話になったというところでございます。そんなような人間でございます。

まずは言い訳から入るみたいな話で大変恐縮なのですが、実はこのスライドは私どもの中越地震のプロセスを並べたものなのですが、どこに住んでいるかによって環境の変化が起きて、課題が変わってくるというような図をつくったわけなのですが、避難所から応急仮設住宅、それから、住宅再建という中で課題が変化していく様子を時系列で載せております。

詳しくは申しわけありませんけれども、私ども中越で大きな課題になったのは、山古志村では震災でインフラが壊れた。だけれども、もう一回戻っていく。戻ったのだけれども、実は40%の人口減少が起きました。この集落、地域の持続可能性はどうするかという、平たく言えば過疎対策みたいなまちづくりが大きな課題になったというところなのです。ですからこの赤四角が中越では非常に課題のボリュームがありましたので、そこがメインになっているのです。ただ、今日は実はこの辺のお話なのです。新しい地域に集落全体で移転をしたとか、あるいは個別に移転をした。そこに対するコミュニティ再生みたいなところを今日は実はお話ししなければいけないというところで、その点については中越ではあまり事例がなく、心もとないなと感じています。

ただ、ここで少し赤線を入れているのは、この部分で非常に行政の方が特に悩むケースになっています。これは中越と同じではないかと思えます。というのは住宅再建まではどちらかと言うと従来のまちづくりとか、いろんなハードの計画を進めるという、従来の行政が得意な分野で進められる分野なのですけれども、それ以降、再建して町ができた。それ以降はある種、住民に主体が委ねられますから、行政の方々は得意ではないという言い方は悪いのですが、ある種、下支えするしかないという話なのです。ですから住民の方々にいかにやる気になってもらうかというところのフェーズが変わっていきますので、ここで支援の質が大きく変化するタイミングだろうと思っております。そういう意味でこの再生研究会というものが、今後の支援をいかに考えるかという趣旨でつくられているのではないかと私は理解をさせていただいております。

次にこれは質の変化みたいな話でして、これは皆さん方にお話するのは大変失礼なのですが、いわゆるこれまでの支援というのは、こちら辺を満たす。安全要求まで満たす。ここまでは行政の方は得意なのですが、ここから先は社会的要求だとか、承認要求みたいなことを満たしていかなければいけないわけですから、これに関しては本当に支援の質が変わっていくというのは当然のことなのではないかと思えます。

実はここで、この変わり目で新潟県も我々も非常に悩みました。何をしたらいいのかわからないというのが本音のところでした。そういう中で模索を重ねてきたわけございま

すけれども、今回の福島の場合は、このスライドが私が想像するこれからのコミュニティの再生のパターンではないかと思っています。

そういう中で今回、皆さん方から御要望をいただいているのは、これはわかりませんが、町外コミュニティの住宅再建あるいは復興住宅の入居、あるいは福島県内での復興公営住宅に入居される方々のコミュニティをどう再生していこうかというところが、今日の問題なのだと思います。

そういう中で、数少ない事例ではありますが、多少事例がございますので、私どもの事例を持ってまいりました。これは先ほど木村参事官とお話しましたが、木村参事官のふるさとですけれども、小千谷の十二平集落というところでございます。これは15世帯ぐらいの集落ですが、震災によって小千谷の町なかに集団移転したところでございます。木村参事官は御存じだと思いますけれども、千谷のほうに移転しました。二人にしかわからない話をしていますけれども、千谷という町場に移転した。山の人町場に移転したのです。皆さん方住民の方々は、この移転に関しては非常にポジティブに捉えています。よかったなと思っています。ただ、やはりお年寄りがどうしてもふるさとに気持ちがあるというか、そういうところがございます、その中で実は我々も長くお手伝いをしました。もといた地域、集団移転をして、家は再建しませんでしたけれども、コミュニティ施設だけは再建をした。集会所だけは。

それから、これは集落誌です。集落の歴史、地震の記録。これを見てください。ボランティアさんが聞きとりに行き、俺なんか字書けないなんて言うおばあちゃんですから聞きとりに行き、こういった記録誌をつくった。あるいはもといた集落に記念碑を建てた。「ここはじよんでえら」という記念碑を建てて、その字を書いてもらったのが当時、救出が一番早く来てくれた自衛隊の方に字を書いてもらったりなんかして、あるいはもといた自宅に記念碑を建てました。屋号で。あるいはそこに自分たちが好きな花の木を植えていました。桜の木が好き人は桜の木を自宅に植えていました。どういうことかということ、毎年毎年ここに集まって話をしようではないかということなのです。離れても。あるいは子供が30年後に立派になった桜の木を見に来てくれるのではないかという思いでやったコミュニティ移転の支援です。この集落誌は皆さん方が大切に持っていて、よかったなと言ってくれています。

これは長岡市川口の小高というところなんです。これも20世帯ぐらい集団移転をしました。山地から町場におりていったという話です。これは実は移転の合意形成を急ぎ過ぎたというところがあって、世代間に実はギャップがあった。年寄りには実は残りが残ったというのが本音なんですけれども、若い人に引っ張られて行ってしまったという形なんです。移転をしたことはしょうがないのだけれども、ただ、同じコミュニティが町場に行っただけなのですが、関係性が変わりました。これまでみたいな住民同士の協力があまりなくなったのです。ご近所付き合いがなくなったのです。同じ人たちなんですけれども、ちょっとびっくりしました。

そこでお手伝いをしたのは、1つはこれ、もとの村にあった桜を引っこ抜いて移植した。あるいは神社を移転させてきました。祭りを復活させた。それから、これが一番大きかったのですけれども、50年続けてきた村の運動会を復活させた。これで元気になりまして、もとのコミュニティのような関係性が生まれてきたというところです。本当に同じ人たちが場所が移っただけでこんなに変わるものかという感じでしたが、このようなことも実はございました。

それから、これは山古志の木籠という集落。これは山古志の中に移転したという話ですから、町場に出ていった話ではないのですけれども、この方々は有名になりました水没集落のところでございます。この方々は今、何をしているかというところ、元の集落の100メートル先ぐらいに移転をしたのですが、そこに水没集落の跡が残っています。そこで語り部をやったり、あるいはここに直売所とか交流施設をつくって元気よくやられています。木籠ふるさと会というものをつくってまして、集落全体では12世帯ぐらいの集落ですけれども、そこには全国の皆さんが集まっています、300人ぐらいの会員数がいます、300人がコミュニティだと言っている木籠の集落でございます。こんなところもでございます。

これはどちらかと言うと町場です。長岡市内にできました。長岡の町場で被災した人たちが言い方は悪いけれども、寄せ集めで集まった公営住宅でございます。今日新聞記事を持ってまいりましたが、これは今、9年目の現状のお話を特集した新潟日報の記事なのですけれども、そこにはシルバーハウジングという復興公営住宅になっています。見守りの方々が常時いるという仕組みなのですけれども、それがセーフティネットなのですが、ここはおもしろいことに子育てのお母さん方が多世代交流館というものを公営住宅の近くにオープンしました。子育てをお互いに協力し合ってやろうとか、悩みを相談しましょうねという話もあるのですけれども、ここが秀逸なのは公営住宅のおばあちゃんが子供の面倒を見ています。読み聞かせだったり、子育てのアドバイスをいただいたりとか、自分の姑よりも他人の姑のほうが話を聞きやすいという難しい世の中でございますので、そんなようなことで実は公営住宅にはおひとり暮らしの方々は非常に他人の子育て、無責任な言い方ですけれども、楽しいですから、次の日に会うとサロンパスがいっぱい貼ってあるのですが、でもそんなようなことで実は元気になっている。あるいは近隣住民とのお花見なんかもこのNPOが仲介をしてやっていったということで、大変このNPOは、この方々は秀逸だなと思います。自分たちの課題も解決しながら相手の課題も解決するという、非常におもしろい取り組みをやっておりました。

これは移転したという話でございませぬけれども、実は我々、地域復興交流会議というものを中越地震以降ずっとやっておりまして、これは何かというと、さまざまな住民主体の取り組みをやっている方々に一堂に集まってもらって情報交換をするという取り組みでございます。最大で400人ぐらい集まりました。情報交換して、どんな取り組みをやっているのかということをお互いにアピールするわけです。すごいなお互いに盛り上がりとか、あるいは競争をしたりというところもございませぬ。

これは、昼間の部に関しては新潟県さんのお金でやるのですけれども、夜は1杯飲みますから、それに対しては民間の寄附でやっていたという、そんなようなことなのですが、実はお互いにどんな取り組みをやっているのかという情報共有あるいは課題の共有、ここに新潟県あるいは長岡市、小千谷市等の職員の方もいました。そこで情報を拾っていったというようなことがございました。これも非常に大事だったなと思っております。

これは新潟の話ですけれども、実は福島の話も実はございます。ピックパレットふくしまは福島県庁の方たちは御存じでしょうが、一時2,000人を超えた。富岡の方がいらっしやいますのであれですけれども、富岡、川内村を中心に双葉の方がほとんど、その町の方々が避難されていた。2,000人を超えておりましたけれども、そこでこんなことが起きています。

みんな市町村ばらばらですから、なかなか自治というものが難しかったのですけれども、何をやったか。1人のおばちゃんがこんなことを言いました。田舎の人と言ったら皆さん方に失礼ですね。おばちゃんが郡山の避難所の周りを見ていると草がぼうぼうで、いてもたってもいられなかったらしいです。だから草取りたいのだけれども、どうしたらいいかなという話で、取ったら悪いかなという話で、じゃあみんなで取りましょうという話で避難者の皆さんに呼びかけて草取りをしましょうという話になりました。最初は50人ぐらいしか集まらないと思いましたが、実は当時、震災から1カ月半ころですが、400人出てきました。みんなで根こそぎ、木まで抜くのではないかという勢いで草取りをやっていた。

先週、富岡にお伺いしてお話を聞きましたが、稲垣さんね、あの草取りで避難所の雰囲気が変わったよとおっしゃっていました。何でか。その前までは困った人がいてもまたいで歩いていたと言っていました。だけれども、この草取りをやった瞬間、次の日から困った人は助け合おうという雰囲気になったんだよってすごいコメントをいただいて嬉しくなりましたけれども、それをきっかけにこういった自主的なサロン活動とか自治会もできました。それから、最後にはピックパレットのお別れ会で、仮設に行く前に夏祭りをみんなでやりました。相馬盆唄の歌い手、踊り手という話でありまして、こんなことが実は福島でも実際に起きているということです。

これは多くの方も今日いらっしやると思いますが、あつまっかおおくまという、柏崎に避難された方々の住民グループです。スーパーで買い物をしていたらどうも聞きなれた声。福島弁が聞こえる。恐々と避難したばかりなのだけれども、声をかけてみたら同じ大熊だった。よかったよかったとスーパーで泣き合ったらしいのですが、そこから大熊の人がみんなで集まろうという話でこんなサロンをつくっています。

今、中越の皆さんと交流をしたりだとか、田んぼ、畑、いろんなことをやっているところもありますし、今、自主的な勉強会なんかもやるようになってまいりました。これも大熊の方々が自分たち主体的にやったというところにして、実は福島の事例でもこういったコミュニティ形成の事例があるんだなということを感じています。

これは東松島の事例です。今回の福島とは多少違う場所ですけれども、東松島の矢本仮設という大曲浜の大きな津波被害があったところの住民の皆さんです。これは中越の皆さんと交流しているところなのです。郷土料理で交流しています。東松島の大曲浜にうまいものは何だと言ったらのっぺだと言うのです。福島にのっぺがあるどうか分かりませんが、実は新潟のうまいものがのっぺなのです。それで、それは新潟のものだ、それは東松島のものだと言ひ合いになったのですが、それじゃあ一緒に交流してみるべという話になったのです。料理は全然違うのですけれども、実は野菜を煮たくずをかいたお汁なのですけれども、東松島の方はどちらかと言うと精進料理。いわゆるお葬式だとかお通夜に出すような料理なのです。新潟の場合は紅白のかまぼこ入れて結婚式に出す。こんなに違うんだという話になったのですけれども、こんなことをしました。

あるお母さんはせがれさんを亡くされて、非常にふさぎ込んだお母さんが、このときにおっしゃいました。いやあ今日のイベントは達成感があつたって。これまではずっとじっとしゃがむだけだった。達成感があつた、よかつたと言って、それを見ていた御主人が非常に喜んでおりました。やはりせがれさんのことをずっと思って仮設の中でふさぎ込んでいることが多かったのでしょうかけれども、こういう自分で動いたということで母ちゃんの表情が変わつたっておっしゃっていました。これがコミュニティづくりの1つだと思います。

このスライドは、使用前、使用後の話なのですけれども、これからのコミュニティづくりで大事なものは、こちらはボランティア、こちら被災者の方です。こういう「される」という関係があつて、実は大事なものは「みずからする」という関係になっていく。こちらは山古志のばあちゃんです。向こうはボランティアです。何をしているかという、笹団子のつくり方を教えているわけです。これをやった後にばあちゃんは何を言ったかという、今の若い者は、笹団子のつくり方も知らないのか。年寄りには長生きしないといけない。体育館にいるときは、このお母さんは何て言ったかという、こんなに人様に迷惑をかけるのだったら、早くあの世へ行っちまいてえとおっしゃっていました。そういうようなことが今後のコミュニティづくりの中で、どこに行くにしろ大事になっていく。こういうことなのだろうと私は感じております。

ここからは詳しくは御説明しませんが、先ほどの課題に対して、これに関しては新潟県復興基金でどんな施策を打つていったかということをもとめております。細かくはしませんが、いわゆるこの青まではどちらかと言うとハード整備です。ここから赤線から下はコミュニティ再生のプログラムです。

2つ申し上げたいのですが、1つはハード整備に比較するとコミュニティ支援には大して金がかかっていませんということです。見ていただいてもわかるように、大してお金がかかっていない。だけれども、お金はお金として使用するのではなくて、住民の人たちが元気になるようなお金の使い方を考えていったというのがポイントだと思います。

もう一つは、最初からプログラムを考えたわけではなくて、住民の変化に合わせて柔軟

にプログラムをつくっていったということは、これは我々としては非常に助かったと思っています。住民の方々が本当に助かったということをお話されているということです。

これは復興支援プロセスということで、これも細かいですから詳しくはお話しませんが、復興計画、コミュニティ再生の考え方、復興基金の主な事業、中間支援あるいはNPO、復興支援がどんな活動をやってきたかということ、時系列にそろえているものがございます。詳しくは御説明をしません。

これは最後のものになるのですけれども、これは何を申し上げたいかという、先ほどの十二平の話。記念碑を建てる、食事をする、あるいは小高だと運動会をやる、祭りを残す。山古志の場合だったら語り部をする。ピックパレットの場合は祭りをやる。大熊の場合にはみんなで集まって勉強会をする。これに関してはこのプログラムをどんと誰かがいきなり入れたわけではないということなのです。大事なのは住民の皆さんが自分たちでやろうという気になって、その出てきた声をもとに取り組みを始めているということなのです。

多分、支援の質も2つあるのだと思っていますのですけれども、言い方は悪いかもしれませんが、閉鎖的で、保守的で、依存的で、もしかしたらあきらめ感を持っている住民に対して、はい主体的になりましょうよ明日から、家ができたからと言ったって無理な話なのです。多分今回もいろんな意味で課題を抱えている方々にしっかりと向き合って、一緒に悩んであげる、考える、寄り添ってあげるといいますけれども、そんなような人がいて、そこから出てきた言葉に事業を入れているということなのです。

この住民に寄り添って、自分たちでやろうと思う時間が実は非常に時間がかかるということです。1年、2年は当然かかると思います。あるいは今の福島の方々、ばらばらになっている方々でしたらもっと時間がかかるかもしれない。そこに丁寧に向き合えば必ずや能動的に変わってくる。これは私自身が自分の原体験から感じているところです。そういう中で、このしっかりと寄り添ってあげる、向き合ってあげるという人がコミュニティ再生というのは一番のポイントなのではないか。この人材養成をどうするのか。ある種こういう人が大事だということに制度を入れたのが復興支援員制度です。実は支援員制度というのは何か事業を進めるための人たちではなくて、住民の人たちに向き合って、住民の人たちの意識を変えるところに本質があると思っています。

そういう中で最後でございます。時間でございますので、コミュニティ再生に向けてということでございます。今回も趣旨にはストレートに合っているかどうかわかりませんが、私がまとめとしてお話しさせていただきたいのは、これは多分皆さん合意しているのでしょうけれども、住民主体のコミュニティ再生であることは間違いのないことです。その主体性を引き出す人的支援、いわゆる人による支援が大事なんだということなのですけれども、今日申し上げたのは実はエンパワーメントという支援の質のものです。要は住民の力を引き出すという支援です。あるいは頑張ろうとしている人をどんどん引っ張り上げていくという支援です。そういう方々は必ず必要です。リーダーをつくっていくだ

とか、自らまちづくりをやろうという方々を引き上げる支援、これは大事です。

ただ、これだけではだめです。セーフティネットという支援も必要です。全員取りこぼさない、落ちこぼれのないセーフティネットを張るという支援も必要になると思います。先ほどの長岡の公営住宅の例は、シルバーハウジングの見守りの人が必ず常駐しているのと、NPO法人多世代交流館になニーナが赤ちゃんの面倒を子供たちに見させる。このパターンだと見守りの人たちがセーフティネットで、エンパワーメントが読み聞かせをする人。だから両方必要なのだらうと思います。それは既に福島の中でも活躍されている方はいっぱいいます。この方々をうまく有効活用していただきたい。

福島県内にもいらっしゃるでしょうけれども、私は全国行ってびっくりしますけれども、山形で活躍する中村美紀さんとか、新潟で活躍する村上さんとか、京都で活躍する西山さんとか、そういう方々が非常に活発に動いています。こういう方々をうまく有効活用するというのが大事なのだらうと思います。

最後に人的支援を有効に生かすためにはということ、プロセスですけれども、新潟もみんなこうでした。多分、これからのコミュニティ再生というのは、これまでの既存の考え方では及びもつかないことになるのだらうと思います。そういう意味では既存のものの中に当てはめてうまくいくことはないのだらうと思います。ある種、モデルをつくりながら、一步一步模索しながら進めていかなければいけないのだらうと思っています。公平に全部一斉にいくなんていうのは難しい。ですからモデルをつくる。そこにはなかなか公平性も、いろんな形で行政が公平、平等を持たなければいけないということがありますから、ある種、民間を活用しながら走らせる、モデルをつくる。いいものを取り入れて、それを波及させていく。そして制度につなぐ。このような繰り返しが必要なのだらうと思っています。

それから、それを支えるバックアップが大事です。ただ単に人を配置すればいいという話ではありません。非常に困難な被災者の方々に向き合うということだけで大変です。そこを支える仕組みが必要だと思っています。実は我々がそのバックアップを中越では担っている。人材育成という形です。私はこのバックアップ体制は、これは多分いろんな案があるかもしれませんが、1つは課題の違う福島県の浜通り、中通り、会津地方。全部課題が違うでしょうが、でもコミュニティ再生をしなければいけないのは一緒だと思います。この課題の違う町村を全部まとめてバックアップするような体制をつくる。そういう中でもう一回、この地域の絆をもう一回つくっていくみたいなことを考えられたらいいのではないかと。

あるいはこのバックアップは支援者、いわゆる人的支援で入るボランティアさんとかNPOだとか支援員さんだけではなくて、実は自治体職員、県職員、この方々もバックアップするような仕組みになっていったらいいのではないかと。あるいはもう一つはここにも書いてございますけれども、課題解決、成功事例の共有をするということ。多分ここが1つの円卓会議になるのだと思いますが、国、県、市町村、あるいは民間が対等な形で議論をする。

その中でいいものを取り入れていく。あるいは課題に関してはみんなで考えるという円卓の場が必要。現場の課題があって、吸い上げて、円卓で議論をして、また現場にフィードバックする。この繰り返しが大変実は人的支援には絶対的に必要だということです。

そういうもので、将来は多分ノウハウ蓄積もそこでバックアップでやって、研究機能を持たせて、福島のこの教訓、ノウハウを全世界に発信するぐらいの仕組みに変えていったらいいのではないかと思います。

それから、ここは皆さん御存じのとおり柔軟な、タイムリーに使える資金も多分必要になってくる。そんな大きいお金じゃなくてもいいということは申し上げたいと思います。

最後、口幅ったい言い方ですけれども、これは多分、新潟県のときもそうだったので、新潟県あるいは市町村、民間、それぞれの立場でそれぞれの役割をしっかりと担いながら、ある種この大変な課題をそれぞれの立場で引き受ける覚悟というのが必要なのだと思うのです。言ってみればこんな大きな問題ですから国がとか、県がとか、市町村がという言い方になりますけれども、そうは言ってもその立場立場である種引き受ける覚悟があって、人的支援が有効に生かされるのではないかと考えています。

口幅ったい言い方で申しわけないのですけれども、このようなお話です。

最後にこれだけは、この前いらっしゃった担当者の方にお話をしてくれということでもありますので申し上げますけれども、山古志の子供たち、当時震災のときに中学校、小学校だった子供たち。自分の学校に通えず町場まで通ったのですけれども、いろんなどころに呼び出されて、山古志の歌を歌ったりだとか、復興ありがとうと言ったりですとか、いろんな人たちと勉強を一緒にやったりとか、そういう経験をさせていただきました。

今、その人たちが大学生、社会人になろうとしています。これは最近、山古志村の方がおっしゃるのですけれども、我々の世代はどこか山古志村が嫌いだった。出ていきたくったと思っていました。でも今の震災を経験した子供たちは、山古志村にどうやったら戻れるか、あるいは戻らなくても山古志村のために何ができるかということ普通をしゃべるようになってきているそうです。この世代の考え方は大きいなと山古志村の方がおっしゃっていました。その子供の声を聞いて大人がまた変わろうとしているということです。そういう意味では今の福島の子供たちが体験していることは、あの人たちが大人になってまた返してくれるということ。それはすごいことなのではないかと感じております。

最後に、今日はガバナンスを持ってきました。これは私を宣伝するみたいな話になっていますけれども、実は岩手、福島、宮城、復興支援員制度を活用している取り組み事例をずっと連載しているものでございます。福島に関しての並々ならぬ皆さん方の取り組みを御紹介させていただいておりますけれども、お暇なときにお読みいただければと思っております。

ちょうど時間ぐらいだと思いますので、以上で私のお話を終わりにしたいと思います。お役に立てたかどうか非常に不安ではございますけれども、御清聴いただきましてまことにありがとうございました。

○司会 稲垣さん、ありがとうございました。

御質問等は後ほどの意見交換のときにお受けしたいと思います。

続きまして、藤さんから話題提供をお願いしたいと思います。

○藤氏 藤です。どうもよろしくお願ひいたします。

今、青森県の十和田市にあります十和田市現代美術館というところの副館長をしております。十和田市に来て1年半ですが、自宅が九州の福岡にありまして単身赴任です。

お配りしました資料が大したものじゃなくてすみません。今開催している十和田湖奥入瀬芸術祭のチラシがありますが、このアーティストックディレクターということで、奥入瀬、十和田湖エリア、美術館などを使いまして芸術祭を好評開催中でございます。

もう一つ、「部室募集」というのを配らせていただいたのですが、これは去年新潟で開催された「水と土の芸術祭」に出品していた活動の一部です。中面では今まで私自身がかかわってつくってきた空間や、いろんな場を紹介しています。

代表的な活動としては、子供たちが要らなくなったおもちゃを持ってきて、物々交換をしながらおもちゃの買い物遊びをするという、「かえっこ」という仕組みがあります。これは2000年に妻と子供たちとつくった地域活動のしくみで、全国に無料配布しており、今も全国各地で、恐らく福島県内でもいろんな地域で開催されていると思います。

2005年に神戸市の震災10年事業で、この「かえっこ」に仕組みを利用して防災のワークショップを学生たちと考え、イザ！カエルキャラバン！というプログラムを実施し、その後、それを発信していくためにNPO法人プラス・アーツというものをつくりました。このイザ！カエルキャラバン！は、モンゴルとかチリとかタイとかインドネシアとか、いろんな海外に広がりを見せております。

私自身はどちらかと言うと空間をつくるというよりも、活動をつくることと、いろいろな人が活動をつくり出すシステムをつくること。そのシステムを見せるためのデモンストレーションをつくることに力を入れています。どういうデモンストレーションをすれば人の魅力、人の気持ちを引きつけるのかということを考えながら、空間づくり、ものづくり、仕組みづくりを分けることなく、同時進行で複雑につくっていくようなやり方をしています。十和田市現代美術館というのは人口6万5,000人の十和田市が運営する公立の美術館ですが、そこの管理業務をしながら、中心市街地の商店街の空き店舗であるとか既存の施設であるとか、利用者が少なくなった観光施設、あるいは廃屋等を利用しながら、地域の方たちがいろんな活動をつくっていく上で、何かいい状況や、魅力的な状況を実践的につくろうとしています。

ところで、奄美大島で大熊（だいくま）町という地域があります。大熊（おおくま）町と同じ漢字を書く地域です。そこは数十軒ぐらゐの集落の漁港でして、両親の両親の生まれ故郷です。私自身は鹿児島市で生まれ育ったので奄美大島2世と自称していました。子供の頃のうちの両親もしくは親戚縁者が住んでいたところは鹿児島市内の高麗町というところで、名前のおおりの、いわゆる大陸からの人や島の人たちが暮らしているようなエリアで、

鹿児島の中でも低湿地帯にありまして水害が非常に多いエリアです。家族の歴史の話になりますが、うちの父親をはじめ親戚縁者の多くが戦時中、奄美大島から本土のほうに疎開してきました。あまり知られていないかもしれませんが、奄美大島も沖縄と同様に戦後になっても米軍の統治になったので戻れなかったという状況が続きました。

今回の状況とはちょっと違うのですが、両親たちも故郷にに戻りたくても戻れないという状況の中で、本土の高麗町というエリアの中で自分たちの生活をつくらざるをえなくなり、その頃、1960年に僕自身は鹿児島市内で生まれたということになります。

ですから、子供のときの記憶でよく覚えているのは、大熊会という奄美大島の大熊から疎開し鹿児島市内で暮らす人達が年に1回集まってやる大宴会です。そこでは蛇味線と太鼓の音と島唄、黒糖焼酎とたばこのにおい。それにヤギ汁。ヤギの血で煮たヤギ肉の鍋のような料理があるのですが、そのにおい。音、匂い、味、そういうものが私自身の身体の中に染みついています。子供の頃はどちらかというとなたばこの煙くさいし、焼酎くさいし、嫌な思い出だったので、毎年繰り返される親父たちや親戚縁者の楽しそうな姿と笑顔と、音、匂い、味がいまだに染みついて、私自身、奄美2世としての自覚に強いものがあり、自分の遺伝子の血が騒ぎ、故郷を感じる事が多くあります。

そのようなことから自分の中の遺伝子とかのありようについてどうも気になってしまうのです。僕の中の一つの性質に向き合ってみると、いろいろなところに移住し続け、その土地に対応しながら暮らしてきた遺伝子が強くあるように思います。たとえば日本において長男は生まれた家を引き継ぎそこに暮らすわけですから、長男、長男、長男と限りなく少ない可能性の場合のみそこに暮らし続けるわけですが、必ずそこには移動してきた妻の遺伝子、女性の遺伝子も入りながら、もしくは次男、三男という遺伝子もありながら、そういうものがずっと永遠に、この画像は遺伝子の系統図みたいなものを書いているものなのですけれども、そのときにどういう経験をしたかというのが次の世代に自分の個人的な遺伝子としてどんどんつながっていく、受け継がれていくという、何かそういう系統図を黒板に書いていったことがありました。

考えてみると遺伝子というのは結婚して子供が生まれることによって母体を通して引き継がれていくわけですから、実は若い頃に、つまり、生まれてから結婚し子供を作るまでの間に経験する様々な圧力によって変化した個人の性質が、そのまま両親より半分ずつ引き継がれていくということになるんだなと常に感じておりまして、その意味で子供の頃に何を経験したか、つまり、子供の頃に暮らした環境、すなわち地域からどれだけ体験的に影響を受けたかということが、1つのその地域について考える上ですごく重要になるのではないかと考えています。

今回はコミュニティの場をどういうふうにつくるのかというようなテーマだとお聞きしまして、そういうことを中心に私自身が考えたことなどをいくつか画像で見せながら話したいと思います。

コミュニティのあり方というのはどんどん変化しています。すごく重要だと思うことは、

先ほどの話もありましたけれども、ついつい人が集まる場というふうに捉えがちなのですが、実はそこは活動をつくる場所であるということが非常に重要であって、それは家庭でもなく職場でもない新しい第3の活動をつくる場所。なおかつそこでいろんな人たちとかかわることができる場所であるという、もう一つの場所という意味合いがあるということです。そこでの上下関係、年齢の差、いろんな経験の差、得意分野の違ういろんな人たちがこのコミュニティの中にいるということがすごく重要なのではないかと考えています。もしもコミュニティの中で問題があるとすれば、コミュニティを構成する人の年齢の差があまりにも少な過ぎることであるとか、分野、経験というのが非常に近い人たちが集まっていることなのではないかと考えています。もともとの地縁あるいは血縁は大家族が基本の単位だったように思います。いろんな経験を持ったおじいちゃん、おばあちゃん、若い人、子供、外部からの使用人等、いろんな価値観を持った人たちが1つのコミュニティの中にいたのだけれども、それがなくなり、単一のすごく近い関係の中でのみ成立してきたことが問題になっているのではないかと考えています。

これは以前、インドネシアの津波被害の現場でヒアリングしたときに気づいたことで、もちろん皆さんも厳しい状況の中で感じたことだと思うのですが、例えば、今まで関係のあった人たちがいなくなったということ、つまり、家族がいなくなり、職場がなくなり、地域がなくなり、それらとの関係がなくなるということは、つまり自分の存在がわからなくなってしまうということにつながるのではないかと考えています。自分が何なのかかわからない。自分が誰なのかかわからない。自分がどこに存在しているのかかわからないということがすごく問題であって、そこに新しい関係をつくることで自分の存在価値、自分の居場所、自分の役割というものをつくっていくということがすごく重要なのではないかと考えています。今回のコミュニティ研究会のコミュニティをつくるということは、つまり、それぞれの自分が、存在を失った自分自身が、それぞれの方たちが新しい関係の中で自分の存在意義、自分の存在をつくっていくということであり、そういう場をどういうふうにつくっていくかということが大きな課題になると考えています。

この画像は1980年代初頭、学生時代につくったカメハニワというキャラクターなのですが、この当時、成長することの意味を探っていたような時期でして、カメさんが空っぽのハニワをかぶっているというようなモデルです。それを「生活」という漢字の2つの「生きる」という漢字に重ねています。つまり、生物的に「生きる」ということと、社会とのかかわりの中で「生きる」ということ。この「生きる」と「生きる」の違いを認識することはとても大切なことだと思っています。

つまり、食べること、飲むこと、生物として生きるということの次に、自分が地域社会の中で、もしくは関係の中でどう生きていくのかという、この「生きる」をどうつくっていくのかということがすごく重要なのではないかと考えているうちに、当時学生のころに考えていたということです。

さて、いろんな地域の中に入り活動するときに、この転校生の法則というのを意識して

います。転校を数々繰り返した人にはわかると思うのですが、転校生に一番最初に寄ってくる人はマイノリティです。個人主義者というか、大きな派閥に属さない比較的自由な人がまず寄ってきます。次に寄ってくるのは第三勢力です。ちょっと仲良くして新しい活動をつくろうとします。これは別にいいのです。この次の第二勢力が厳しい。要注意です。その人たちと仲良くなってしまうと後々大変になる場合があります。

ここで言わんとしていることは、人との接し方の作法のようなものです。新しいコミュニティに入る人の立場のことを考えたときに、常に転校生の気分であるというのは、自覚しといたほうがいいと思っています。これは受け入れる側も、入る側もです。どちらかと言うと第一勢力の人たちは冷静に眺めています。外部からやってきた存在を警戒しつつなかなかオープンにはしません。そして「使える」とわかったら必ず最後にやってきます。その時に第二勢力の中に入り込みすぎていると排除されてしまったりします。

突然ですが、学生時代にゴジラの着ぐるみをつくって街を散歩したりしていた当時の写真です。誰にも語れない悩みのゴジラとありますけれども、エネルギーはあるのだけどもってしまって語れない存在です。周辺との関係を探りながら、自分の存在を探している状態です。そしてハニワさんと出会い、関係を探っていくというのが私の大学院の修了制作「ゴジラとハニワ結婚離婚問題」でした。ゴジラとハニワが結婚なんてあり得ない話なのですが、こういう全然違う異質なもの同士の関係というのが、実は新しいものを生み出していくためにすごく重要で、常識を超えた全然違う関係の中から次の活動が生まれていくのではないかということを感じていました。

もう一つ、転校生の法則と同じようにいつも思っていることは、数学上の公倍数のようなあり方を目指さなければいけないということです。知らない者同士、全然関係ない者同士、全然違う地域の人たちが「分かり合えるわけがない」という考え方や、「共通項なんてあり得ない」という話もあるのですが、数学上はどんな数字にでも必ず公倍数、公約数というのがある。共通の要因があるということがすごく重要だと考えたことがあります。ただ、このときに一般的にはわかりやすい公約数を求めてしまいがちだと思うんです。つまり1にしてしまいがちです。「あなたと私は全然違う」、「共通項は何だろう」、「結局愛だよね」とか「平和だよね」とかいう話です。それは当たり前のことで間違いではないのですが、そうではない。先ほどのプレゼンテーションでかけ算の話が出ていて非常に共感したのですが、かけ合わせる関係というのが非常に重要なのではないかと感じています。つまり公倍数の関係です。掛け合わせることで意外な数字、予期せぬところに行ってしまう。つまりコミュニティの中で関係ないと思われている全く異質な他者、ゴジラ君みたいな存在があらわれても、実はそこにかかけ算をすることであり得ないものが、あり得ない数字が出てくる、結果が出てくるということになるのではないかと感じているということでもあります。

これはまた全然違うプレゼンテーションで、空間の作品で人口増加のことを問題にした作品の写真ですが、ここに書いているのは、とりあえず、とにかく個性を発揮して新しい

常識に向かって生きることが大事なのではないかということです。感性をとじこめるのではなくて、感性を開いていくということが大切なのですが、なかなか閉鎖的なコミュニティでは個性や個人の感性は抑圧されています。それをいかに解放し、開き、発揮できる環境をつくれるかということです。

よく言われる外部者（わか者よそ者ばか者）というのは、そういう意味で因子として全然違う要因ですから、これをかけ合わせるとすごくおもしろい状態になってくる可能性があります。先ほどの支援員にもつながる話だと思いますが、地域でも全く利害関係のない外部者をうまく活用するということが非常に重要だということを感じております。

今回いただいた資料の中にも、よく多種多様という言葉があります。仕組みをつくっていく上で女性とか高齢者と子供とか、そういう多種多様な人に対するアプローチという考え方です。それは間違いではないと思うのですが、多種多様と言うとどうしても平面的な視点のように感じてしまいます。実はそうではなくて、多層多面的な捉え方をしなければいけないのではないかと考えています。どんな個人の中でも、もちろん私自身の中でも、ある1人の人の生活の中に親と子供あるいは妻との関係の問題、老人介護の問題、高齢者の問題、年金、保険の経済的な不安の問題、地域社会の安全や環境の問題等、いろんな問題を多面的に、多層的に抱えている捉えることが重要だと思っています。

多種多様性と言ってしまうと「いろんな他者がいる」という捉え方をしがちなのですけれども、でも実はそれぞれ皆さんそれぞれがいろんな面を持っていて、状況に応じていろんなふうに変っていくという捉え方が新しい仕組みをつくる上ですごく重要なのではないかと感じています。仕組みをつくるについつい人を分類し、レッテルを貼ってしまうことは危険です。女性だからとか、この人は何々しているからとか、農業しているからとか、被災者であるとか加害者であるとか。ところが、農業していても土木作業もできるし、哲学者、文学者かもしれない。釣りはするし山の木も知っている。いろんな面を持っている。それが無視されがちな仕組みというのが多いような気がしているのです。コミュニティをつくる上で多種多様性よりも、多層多面性から考えていくことがすごく重要になるのではないかと考えています。

それともうひとつ大切な概念があります。それはOSという概念です。私はかなり初期だと思いますがコンピュータ世代なものですからついついこの話をしてしまいます。1980年後半以降、OSという概念が発生し定着することで社会の捉え方がずいぶん変化してきたと感じています。ご存知のようにOSというのはコンピュータを動かすうえで欠かせない基本システム、オペレーションシステムのことです。そして社会にもOSという概念の導入が必要なのではないかということです。私もiPhoneのOSをついこの前更新し、コンピュータもWindows8になりましたが、OSという発想がなかったときは、ワープロはワープロ、グラフィックはグラフィックの専用機がハードに組み込まれて存在していました。そして地域づくりにおいてもソフトとハードという言い方がされてきました。

ソフト事業とハード事業というふうに以前は捉えられてハードではなくてソフトだなど

といわれた時代もありましたが、実はそうではなくて、どういうOSを、オペレーションシステムをどのようにつくるかということが問題になるべきだったわけです。OSを更新させることでいろいろな状況に対応し、様々なアプリケーションが発生します。先ほどの新潟の例でも出ましたけれども、いろんな活動が自主的に発生していくOSをつくるべきなのです。しかしOS的感覚がないとOSの存在が見えませんのでついつい勘違いしてハードとアプリケーションをつくろうとしてしまいます。住民を置き去りにしながら数々のイベントを自分たちで仕掛け、自分たちの実績として楽しみ、ひたすら参加を呼びかけるというやり方をしてしまいます。OSを入れ込むべきハードという考え方をすると、1つの新しいでかい建物を建てるという発想から離れ、いろんな状況に応じたいろんな空間がハードとして使えるという視点が生まれてきます。使える空間を開放し、どんどん使っていけばいいという発想です。ここで必要なのはOSをどう構築するかというOSのデザインの問題だと思っています。

先ほど話しましたように、コミュニティというのはいろんな多層多面的なプログラムが発生する可能性があるということです。これは誰がかかわるか、違う人がかかわることによって変化していくということだと思います。やりたい人がやりたいことをやりたいだけできる環境の整備とそのような状況が生まれる仕組みが求められているということです。

おもしろい活動には人が寄ってきます。おもしろい人が集まってきます。おもしろくない活動には人は誰も寄ってこないです。では、おもしろい活動はどうやったら発生するかというと、もちろんやりたい人が懸命に自分からやりたいことを面白く好きにやっている状況があるということです。今日来られている方はほとんどがそういう状況、つまりOSづくりに携わっている方だと私は思っています。あくまでも活動、つまりプログラムやアプリケーションをつくるのは、そこに暮らす人、そこに関係を持つ市民、住民だと思います。どういう人を受け入れ、どういう仕組みをつくることで活動が活発になるかということに悩み苦しんでいる立場だと捉えています。しかし、一方で人生を楽しむ権利を与えられたひとりの住民でもあるわけです。

もう一つ、私たちの業界の中で注目されている重要なことがあります。未完成の場をどのようにデザインするかという課題です。物をつくるとか場所をつくるというときつい空間のほうに目が行きがちなのですけれども、実はつくるという時間、期待の時間をつくるということがすごく重要になります。

何かをつくるということというのは、何かができるまでの間の時間が楽しい。私自身子供の頃は喘息持ちで病弱だったのですが、喘息で苦しんでいるとき、プラモデルをもらい、プラモデルをつくり始めて、すっかりプラモデルにはまり、喘息の苦しさを逃れる手段にしていた経験があります。プラモデルというのはつくり終わったら終わりです。作ったものにはあまり価値がない。つくる間が楽しいのです。箱絵を見ながら軍艦とかスポーツカーとかすごくカッコいいなと妄想し、その完成の姿に向かうプロセスを楽しむものです。仕上がってしまうとただのプラスチックのかたまりなのですが、つくるときは大海原を走

る軍艦を夢見ながらつくるわけです。そのつくるプロセスが実は楽しい。期待の時間というのはつくるという行為の中には必ずあるということが重要だと思うのです。

今、実はコミュニティをどうつくっていくのか、地域をどうつくるか、街をどうつくるかというのは、本当は絶望にある時間を期待の時間にどのように変化させるのかということだと考えています。大切なモノであればあるほど、それをいかにつくるかという期待の時間を共有することが大切です。できあがったものをぽんと渡されても、それをつくる大切な時間を全て奪われたような気になるのではないかと感じております。

様々な活動は結果として空間をつくる、場をつくると思っています。いろんな活動が始まることによって結果として場ができます。先ほどのプレゼンテーションにもありましたけれども、やらされている時間、これほどつらくて長いものはありません。やらされているのではなくて、自分たちがやりたいことをやる時間、楽しい期待のある時間をつくるのが大切なのです。だとすると、このコミュニティ研究で、ここから先に地域でつくらなければいけないのは、場でもコミュニティでもないかもしれません。何かの期待に向かっている時間をつくるという捉え方が重要なのではないかと感じております。

魅力的な人が集まって活発な活動が発生する場の条件というのは何だろうと考えたことがあります。そこには自由に使える道具とか材料がいっぱいあることも重要ですが、懸命に何かをつくろうとしている態度がそこにあることが大事だと思っています。「何かをつくろうとしている態度」は伝播していきます。周辺にある種の前向きで積極的な空気感のようなものをまき散らし、空間自体が面白くなっていく。やさしさと笑顔と寛容さが大切なのです。逆にだめなものもあります。何か新しいものが生まれるときに、どうやったら新しいものが生まれるかというのはわからないけれども、ただ、これがあつては絶対に新しいものは生まれないというマイナス要因だけはわかってきたという話も耳にします。何かが発生するうえで阻害要因となるものは意外と身近なものです。「何かを教えようとする態度」であるとか、「厳しい規則、ややこしい利用条件」、「目標・ミッション」、「上から目線とか管理者の視線」、そういうものはおもしろく活発な活動を阻害する要因になっていたりします。しかしその自覚は全くありません。とにかく、何かをやらせようとするのではなく、一緒につくろうとする態度が大事なのではないかと感じております。

僕の家族と立ち上げた「かえっこ」というプログラムは予想を超え様々な地域で活発に利用された結果、家の倉庫に50万個ぐらいの不要なおもちゃが集まっております。

誰とつくるか、誰と過ごすか。「誰と」の関係によって価値が変わるということもすごく重要です。先ほどの支援員もそうですけれども、誰と活動をつくっていくのか。誰と場をつくっていくかということによって状況は全く変わります。つまらない顔をしながら、ぶつぶつ文句を言いながら絵を描いている人の横で絵を描いても何もおもしろくないわけですが、楽しそうに絵を描いている人の横で絵を描くと、何か知らないけれども楽しくなります。一生懸命楽しそうに絵を描いている人と同様に、地域を作る仕組みの上では、本当におもしろそうに、楽しく地域をつくろうとしている人を横に存在させることが重要だ

と思っています。

ぬいぐるみを解体し、それを素材として新しいものを作る「モコモコラボ」というオープン工房みたいなものをつくったことがあります。その中にどれだけ魅力を数多く配置できるのかが重要だと感じていました。人の魅力、空間の魅力、素材の魅力、いろいろな人たちを受け入れるために、様々な人に届く、様々な魅力をつくろうとする態度が必要なのではないかと考えています。

植物を育てる上で必要な要素として土、風、光、水があると思うのですが、これは人間の性質（たち）に分けられるなと思ったことがあります。土の性質というのはその土地で育てたがる人です。ここで発芽させ、何か育て、実りをつくりたい人です。

風の性質の人というのは、何かいいものがあるとすぐ運びたがります。他のところに行って、これはいいぞとか、こんないいものがあるよとか持ってきたがる人。

光の性質の人というのは光を当てたがります。新聞記者だったり、ライターだったり、評論家だったり、ある種のメディアの人かもしれません。面白い出来事や素材、あるいは種に対していろんな角度から光を当てたがります。

もう一つ、水の人。この人がすごく重要だと思っています。興味と関心を注ぐ人です。これはおもしろいね。これはすごいね。何かわからないけれども、とにかくおもしろいものに集まってくる人です。なんの利害関係もなく、ひたすら面白出来事に集まってきます。だからと言ってそれを育てようとかひかりを当てようとかするのではなく、純粹に興味関心を注ぐ人です。その人たちをどう集めるかというのがすごく重要なのではないかと考えています。

もちろん、人それぞれいろんな性質がありまして複雑です。いろいろ重複した性質が複雑に絡んでいる人も多いと思います。ここで重要な視点があります。光を当てる人とか、土地で育てようとする人とか、何かを運びたがる人というのは意外と職業に結びついて人が多いような気がします。例えば皆さんのような役場の人たちはその地域で、何かをつくらなければいけないというミッションを持って仕事をしています。コンサルタントとかアドバイザーとかは風の人で、新しい情報や技術を運び届ける仕事といえるかもしれません。光を当てるジャーナリスト、メディアなどもそれで仕事をしています。ところが、水の人というのは本当に興味関心のまま動くので、おもしろいと思ったら行くのです。水の人というのは本当に興味関心のまま動き、おもしろいと思う現場に登場し、おもしろくないと思ったらすっと消えてしまいます。何の利害関係もありませんから、興味、関心がなくなった瞬間にいなくなります。ただ、この水の人というのをどういうふうに捉えるのかというのがすごく重要で、これがあるジャニーズのファンみたいな感じだと洪水のような水になって大変なことになりますので抑制することを考えなければなりません。大きな水の流れもありますが、小さなささやかな水の流れもあります。面白い活動が発生する状況には必ず横で「いいね」と興味関心を注いでくれる人がいるものです。逆に、そういう水の人が横にいることで、その人は育っていきます。

外から来る人は風の人だと言われています。種を運び、新しい情報を持ってくる風の要素を期待されがちですが、実は水の役割を果たす場合が多いということに注目すべきです。その地域に眠っている種、そこにあるいろんな人たちの才能に、興味関心という水を与えて、それを開花させることができるのではないかと考えています。

この水のバランスがコミュニティの中で何かをつくるうえで重要であるということです。一生懸命つくっていく人も必要なのですが、その横でこれはおもしろいね、これはいいねと言って興味、関心を注ぐ人がいないと、あらゆる活動というのは続いていきません。

最後に、最近やっている部室をつくる活動について紹介します。最近増えてきていますが、あらゆる人に開かれたコミュニティスペースを作ろうとしてもなかなか広がりを作りにくいのが現状です。運営していかなければならないのでカフェをつくったこともありますし、様々な質のたまり場的なものをつくってききましたが、その場の運営を持続するというのは実に難しいのが現状です。それを例えば部室的なイメージで捉えてつくるとすればどうだろうというアイデアです。

いろんな地域活動というのが、部活動に例えられるようになってきたと感じています。部活動というのは自分たちがやりたいから行う主体的な活動です。基本的に楽しいからやっている。別にやらされているわけでもありません。そこが重要だと思うのです。地域に部活動のようなものは増えてきているのですが、部室がない。高校とか大学とかの部活動には必ず部室があったのですが、地域社会で行われている部活動には部室がないことに気づいたのです。自分の経験を振り返ってみると実は部活動よりも部室が重要だったのではないかと気づいたのです。私自身、高校時代は美術部、大学時代は演劇部、バレーボール部、軽音楽部、いろいろやってましたが、特に高校時代、部室は唯一の逃げ場のような感じがありました。部室というのは別に目的がなくても朝、昼、夕と授業時間の合間に訪れる場でした。特に何か目的があるわけでもなく何かおもしろそうな人がいるから、おもしろい先輩がいるから集まる場所でした。部室はある程度閉鎖的になるのかもしれませんが、部活動そのものが地域に開かれていけばいいのではないかと。もしくはいろんな部活動ができるという仕組みが地域に開かれていると、いろんなおもしろい活動が加速するのではないかと。そういうふうに思い、先ほどの「興味と関心」をいかに集めるかというときに、部室を使うというのがいいのではないかと考えたわけです。いろんな地域には様々な空き店舗、遊休施設があります。中心市街地のスナック跡、商店の跡、もしくは飲食ビル丸ごと、学校跡等様々な場所があります。今、奥入瀬でやっているのはホテル丸ごとですけども、そういうものを活動の場にしようとしたときに、いろんな活動の部室として開放すればいいのではないかと考えています。いずれにせよ、興味・関心を集積し、面白い活動が面白く展開し、面白い人が集まってゆくことがコミュニティづくりにとってはとても大切だと考えています。

ここに1つ小さく書いてあるのですが、支援という形から協力という形に変化していかなければいけないのではないかと考えています。僕の考えでは支援はあくまでも東

縛に繋がります。束縛からいかに解放されていくのか。その地域の人たちが力をつけながら協力関係、パートナーシップ、対等な関係をつくっていく。自分自身を高め、変化しながら協力関係を増やしていく姿勢が重要なのではないかと考えています。

私自身、若いころに青年海外協力隊に所属してパプアニューギニアという国に2年間派遣されていたのですが、そのとき国際協力という概念について学びました。協力隊の現場は国際交流ではありません。そして支援や援助でもないということです。援助を受けている地域はなかなか自立できず、育っていかない。あくまでも協力関係にあることが重要だということを学びました。

最後に「常識を超える」ことについて話したいと思います。美術活動であるとか、何かを表現するということは、自分自身の常識を「どう超えていくか」ということだと思っています。そして地域の人が地域で表現することは地域の常識を超えるということに繋がるのではないかと考えています。つまり、いかに地域に根付いている常識や風習、慣習などに騙されないで活動を行い、自分の常識をどう超えていくのかということです。

ここに出ているのは1991年にやった展示の写真です。東京でサラリーマンをやっていた時期なのですが、「食うために働いている」という違和感から、一カ月分の給料で全部お米を買ったことがあります。食うために働いているのだったら米を買えばいいですよ。ところが一カ月の給料で1トンのお米が買ってしまったのです。その1トンのお米を借りていたビルのワンフロアに敷き詰めて、食べ続けていたのですが、一年も経つ頃には虫がわいてきてしまい、どうしようということになる。1人で1トンを全部は食べ切れない。そこで皆に呼びかけました。この「皆に呼びかけた」というところの「みな」というのが実はコミュニティなのではないかと思うんです。

毎日自分でご飯を炊いて食べていたら別に何の問題もないのですが、1トンの米だったので虫がわき出てきた。だからそれを乗り越えなければならない状況に置かれる。それをひとりで考えずに皆に呼びかける。そうすることでおにぎり祭りを開催するかとか、ギネスに挑戦するとか、いろいろ考えるプロセスが発生する。何か新しい繋がりが発生し何かを作ることに向かう楽しい時間、期待に満ちた時間が発生するわけです。その辺がキーポイントになるのではないかと考えて活動を続けております。

時間が過ぎまして申しわけございませんでした。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。

それでは、これから意見交換に入っていきたいと思います。お二人の有識者の方の話題提供等を踏まえまして、何か御意見、御質問等ありましたら挙手でまずお願いしたいと思います。

○復興庁 復興庁の木村でございます。

まず稲垣さんにお聞きしたいことなのですが、1つは稲垣さんも立場的には民間の方でいらっしゃるって、今日集まっている我々は行政なのですけれども、民間の方々の力をどういうふうに我々としてマネジメントというのか、どういうふうに生かしていったらいいの

かなと思うのです。稲垣さんのところの組織のようにある程度、主体的に自発的に出てきていただけるということであれば、それは行政としてはありがたくて、すぐに前向きな取り組みが進むと思うのですけれども、我々は特に民間の方々とコミュニティづくりについて、どういうふうにおつき合いしていったらいいのかわからない。何か新しい仕組みなり、例えば資金の支援の仕組みであるとか、そうした枠組みを設けたほうがいいのか、あるいは何か妙案がもしあるのであれば教えていただきたいと思います。これが1つ目です。

もう一つは人材が大事であるというお話は聞かせていただいて、特に復興支援員なのですけれども、復興支援員の方がコミュニティをケアしていくという、理想的な単位としてはどの程度なのでしょう。1人で何カ所か見られるものなのか、あるいはやはり1人は1カ所で専念してということなのその辺の現場感覚を教えていただければと思います。

○稲垣氏 御質問ありがとうございます。

1つ目は相談にのれると一番いいでしょうと思うのですけれども、そこはもしかしたらバックアップ機能というところも肝かなと思っておりまして、ある種民間の立ち位置もわかりつつ、行政の立ち位置もわかりつつあるような中間みたいな方が、そこである種通訳していったりだとかということの役割を多分バックアップ機能、県単位ぐらいにあるといいのではないかと。

実はビックパレットのとき、多分それだったのだらうと思うのです。実はビックパレットで富岡の方、川内村の方々が本当に日々努力をされた。そういう中で県庁の方も頑張られているということなのです。そこに行政と住民の橋渡しに多少通訳がわりに私たち民間の人が少し入った。ただ、実は県でもやりづらいことはわかっているし、住民もこうやってほしいことはあるけれども、それが言葉になっていかないというところも橋渡しをする。そういう存在というものが非常に大事になってくるだらうと思っていて、多分そういう方はいらっしゃると思います。

ですからそういった方々をしっかりと現場に入れるというよりも、むしろちゃんとバックアップ機能の中につなぐというところでも役割をちゃんとつくられると、多分すぐには機能しないかもしれませんが、そこで考えなければいけない一番大事だと思うのは、やはり行政だとかいろんな方々が悪いわけでもないし、だめなわけでもないし、よくしようと思ってやってもなかなかできないこともあるわけです。そういうことも理解しつつ、それをバックアップするような仕組みといたしまししょうか、そういったものがすごく大事なのだらうと思います。

もう一つ、単位の話ですけれども、これはいろんな今回の復興支援の中ではどうかと思いますけれども、わからないですが、今、総務省のほうで地域おこし協力隊ですとか、総務省の集落支援員といういわゆる過疎対策で人を入れるという取り組みをやっておりますけれども、ここで何となくわかってきたのは1つのコミュニティ、特に実は中越の場合は平成合併前の町村単位ぐらいですね。あるいは昭和合併前の町村単位ぐらいに複数人数を入れていました。その中で複数のチームがいくつかのコミュニティ触るといふかかわり

方をやってきたところでした、これが全国で動いている地域おこし協力隊が集落支援に行
って、1つの集落単位に1人が入るということはあまりよくないことがわかってきました。
コミュニティから逃げられなくなりますので、本当に相性が合わないと非常に不幸のかた
ちになっていきますので、ですからあるチームで複数のコミュニティを見るということがい
いのではないかとこのところが最近になってわかってきたところで、そのあたりでいいで
すか。

○復興庁 ありがとうございます。

もう一つ、今度は藤さんに質問なのですけれども、部室をつくりましょうというのは非
常に個人的には興味を持ったのですが、復興公営住宅をこれから皆さんとつくって行って、
そこは長期避難の方がかなり福島の場合いらっしゃるの、そこが拠点になっていく。人
がそれなりの規模、100世帯、200世帯とか集まってきて、そこはいろんな町の方が入っ
てくるので、そのコミュニティをどうしましょうというのが研究会の出発点なのですけ
れども、部室みたいこういう空間が非常に大事なのだろうなというのが改めてわかってき
たのですが、我々はどうしてもそういうコミュニティ空間をつくれと言われると集会所み
たいなものをただつくってしまって箱だけできる。支援制度は十分にあるので、もっとい
いコミュニティ空間を整備できるのであれば何とかハードもソフトも含めてつくりたいな
と思っていますのですけれども、そういうコミュニティを形成するための「部室」をつくる
ときの肝というか、何かアドバイスがあれば教えていただきたいと思います。

○藤氏 例えばその近くの地域の中に既存の遊休地だとか遊休施設などがもしあれば、例
えばそういうものをつくっていく。接点をつくるということなので、基本的に場をつくる
というよりも、いかに関係をつくっていくか、セットをつくるかということであると、む
しろ新しいエリアの中に新しくつくるよりは、もともと既存の住民がいるようなところ
にあえてつくっていくというのもあるかもしれませんし、そこを2つをつなぐような役割を
担うわけですから、新規住民のみならず、もともと住まれている方、もしくは移動でき
るわけですから、異動の時間もしかしたらすごく重要かもしれませんし、それが何部
なのかによって全然違う。例えばそれにふさわしい場所がそれぞれあるのではないかと
思います。

私はこの部室をつくろうの中にもありますけれども、私の作業場は養鶏場の跡でして、
養鶏場をやめて15年ぐらいしたところに親父が借金しながらも遊ばせていまして、ふてく
されていまして、そこをお借りして今、60名ぐらい倉庫として、工房として借りている場
所があるのです。そういうところに行くと、皆さんいろいろそれぞれのところですよごく活
動しているのですけれども、それぞれの中でまたコミュニケーションが生まれていたり
とか、いろんな活動が派生していくということもあって、意外と養鶏舎とか使える。

というのは養鶏舎というのはもともと迷惑施設なので、どちらかと言うと町はずれにあ
るわけですが、においとか音も出せるということで工房にはもってこいというのがある。
ただ、それがどういう場所なのかというのが、中心市街地の中によくあったスナック
街の跡とか、ああいうものを見ると全部あいていたりすると、部室のかたまり、クラブ

ボックスがいっぱいあるような、そういうところに見えますし、部活動というのはすごくおもしろい、部室というのがおもしろいなと思っているのは、部室で活動をつくるわけではない。例えば吹奏楽部の部室は物置だったり音楽室だったりするわけで、でも活動はホールでやったりとか、スポーツ系はもちろんグラウンドでやったりとか、いろいろ活動する場所はほかにありながら、ただ、それが集まってくる場所なので、もちろん中にもあってもいいですし、なおかつ自分たちでつくってもいいよぐらいの感じでもいいかもしれないという気もします。大学時代のクラブボックスは全くつまらない。ただ小屋が並んでいただけだけれども、それでも楽しくみんなで作っていったという経緯もありますから、むしろ殺風景でどうでもいいもののほうがいいのかもかもしれませんし、いろんな作り方があるのではないかと。

あと、先ほどのものにつながるのですが、支援員にしる部活にしる、こちらがつくるというのではなくて、あくまでも募集してどうでしょう。こういう人を派遣できるけれども、どうしよう。こういう部室とか、使う人がもしあればどこか探しますけれどもみたいな感じでいくぐらいのシステムのほうがいいのかと思います。

○復興庁 ありがとうございます。

もう一つ、稲垣さんによろしいでしょうか。今、我々が議論をしている、先ほど申し上げましたように、まず復興公営住宅で、長期避難の方がお住まいになる住宅を早期に整備して、まずは仮設から早く移っていただくということが大前提で議論しています。公営住宅に移られる方も当然いらっしゃいますし、御自分でご自宅を建てるという方もいらっしゃる。あとは借り上げ住宅にお住まいの方が結構いらっしゃいまして、借り上げのままでもいいという方もいらっしゃる。

公営住宅はある程度まとまった規模で住まわれるので、そこがメインにはなるのでしょうけれども、実際は、福島市であれば福島市内に避難者の方がばらばらに点在をしているのです。そうした方々のコミュニティをどう維持していくかというのが我々の考えなければいけないことなのですけれども、その時に、やはりコミュニティをつくっていく方々がどういう方々なのかというのが一番大事だと思います。ただ、復興公営住宅はまだつくっている最中で、入居者はこれから募集していくという段階なのです。あと1年弱ぐらいかかってしまう。そこからコミュニティの形成がスタートするというのもあるかと思うのですけれども、その前に、例えば募集を早めて早く入居者を来て決めてしまったほうがいいのか、何かポイントになるようなことがあれば。やはり集まってからでないとなかなかそれはうまくいかないよということであれば、そう理解しますし、事前にやれることがあればやっておきたいという気持ちがあります。その辺どうなのでしょう。

○稲垣氏 今のお話を伺って、実は中越の場合そうでしたけれども、大多数のことは住宅再建のめどがつかないと、そのときのコミュニティまで目を向けるような方は少ないのだろう。これは大前提としてあるだろうと思います。

ただ、そうは言っても今でも仮設の中でも借り上げの中でもリーダーシップをとって

らっしゃる方はいらっしゃるわけですから、この方々がどこに住まわれるかというのは正直見えないところではありますけれども、こういうリーダーシップを発揮できるような方々を大勢つくっておくことが1つできることなのだろうなと思っています。

あとは、これは本当に復興公営住宅のお話もそうですし、借上げの話もそうですし、自宅再建の話もそうなのですけれども、我々の中越の場合ですといわゆる地元というか、地域のアイデンティティでつながっていたわけなのですが、これが果たしていわゆる浪江とか大熊とか双葉というアイデンティティでつながるべきものなのか。あるいはそうではなくてもう一回新しいアイデンティティをお互いに確認し合ってつながっていくものなのか、あるいはもしかしたら今の部活の話ではないですけれども、趣味だとかいろんな形でのアイデンティティでつながってくるのかというのは、正直私もわからない。これは本当にやってみながら、徐々にやっていくしかないのだろうなと思います。

ただ、事前にできることは、そういうリーダーシップをとる、自分たちの生活を何とかするんだ、自分たちの周りを何とかするんだという方が非常に多くいらっしゃることはたしかなので、その方々をしっかりと支えることは、その方ならどこに行っても多分リーダーシップをとってくれるから、それはできると思います。

それから、先ほどどんな単位でという話でしたけれども、補足しますと、先ほどの話はどちらかと言うとエンパワーメントの話であれば、そういう形です。ある種バスケットボールで言うとゾーンディフェンスみたいな感じです。ただ、セーフティネットとかあればこれはマンツーマンです。しっかりと公営住宅にしっかりとあるチームが張りついて、そこをしっかりと見守るといってセーフティネットに関しては複数ではなくて、しっかりとそこはマンツーマンでやっていくということは補足して申し上げたいと思います。

以上です。

○復興庁 ありがとうございます。

○司会 本日御参加の市町村の方から何か御質問、御意見ございませんでしょうか。

○福島県 稲垣さんに御質問したいと思いますが、先ほどの藤さんのお話にも風というお話があって、我々これから人もコミュニティ拠点の生活拠点のところに担当に張りついていただいてやっていこうと思うのですが、避難者の方々から募集をするという手もありますし、外から来ていただくという関係もあって、今、具体的には各町でコミュニティ、いろんな面倒を見ていただいているのは、大体町民の中からリーダーシップのある方に頼んでいたというのがあるのですけれども、なかなか今回今度、例えば浪江なら浪江が全部一緒になるわけではないものですから、ある程度、その棟は浪江の棟みたいな、A棟は浪江のところで30世帯は全部浪江ですよというふうにはなるのですけれども、なかなかそこから代表として選ぶよりは外部とか、例えばいわきならいわきのほうからとか、全国から公募したものがうまくいくのか、その辺の感覚的にはどんなものなのでしょう。○稲垣氏 これも私の考え方なのですが、1つはセーフティネットとエンパワーメントで多少分けて考えたほうがいいのかと思います。今の例えば仮設の中で生活する、

仮設の支援員をやられている生活支援相談員だとか、あるいは警察職員の方々なんかは多分、いわゆるセーフティネットでいらっしゃる方であります。ここはセーフティネットのミッションというのはしっかりと出し、そのうえでしっかりと教育するという話であれば、地元の方でもいいのではないかと思います。

エンパワーメントのほうは、これは近隣の方、地元の方、誰という話ではないのですけれども、できれば外の方のほうがいいのではないかと思います。非常に今、多いのが、これはこういう言い方をすると悪いのですけれども、30代、20代の方々です。この方々は実はガバナンスにもそういう形で書かせていただいていますけれども、彼らは我々の世代と違って感覚的に何かお金だとか経済だとかだけを気にしているわけではなくて、社会にどうかかわって新しい仕組みをどうつくっていくのかとか、その中で自分の役割は何だということ、何かそういうところに非常に動機を持っている方が非常に多いのです。

ある方が言いましたけれども、ビジネスはアジア、ソーシャルは地方でというような本がありますけれども、そういう方々は実は、今日は多分浪江の方もそうですし、双葉の方も感じられていると思いますし、あるいはRCFの藤沢さんがやられている釜石なんかそうですが、そういう30代、20代の方々が非常に意欲を持ってそういうところに取り組もうとしているので、こういう方々をうまく活用するような形がいいのではないかと。

それはどういうことかということ、もちろんそれはコミュニティ再生というところで何かをお手伝いするというよりも、実はそういう若い人たち、そういう人たちが入る中、コミュニティもつくっていくし、実はその若者も育てられているというか、その両方がありますので、そういうようなことを、そちらのほうがいいのではないかと。そういう中でエンパワーメントの人材を入れていくには、これは浪江もそうですし、双葉の方もそう感じていますけれども、一気にどんと雇うのではなくて、少しずつやりながら、ノウハウためながらやっていくという形のほうがどうもうまくいくような気がしますので、そんなような形でセーフティネットとエンパワーメントということを区別しながら、人をどういうふうに雇用していくのかということを考えられるのが一番いいのではないかと思います。

以上です。

○復興庁 避難元の自治体の皆さんも遠慮されずにご発言をどうぞ。よろしければ順番に葛尾村さんからよろしいでしょうか。

○葛尾村 葛尾村の本多と申します。

稲垣さんに質問なのですけれども、リーダーシップを持った方、村にもいろいろいらっしゃるのですが、やはりそういった方はなかなか我が強くて難しい部分があるのですけれども、そういった部分をうまくいい方向へ持っていくためにはどうしたらいいのでしょうか。

○稲垣氏 結構支援員とかいわゆる人的支援というのは、実は既存のリーダーを応援する枠組みではなくて、新しいリーダーを台頭させるみたいなどころがありますね。ですから特に女性だとか若者だとかをどう引き出すか、力を引き出すかという話なのだろうと思う

のです。

だからやはりこれまでの既存のリーダーの方々が悪いというわけではないですけども、そういう方々にも目配せしながら、ある種これも昨日田村市の応援隊の方が来られたので、そこでどんな役割ができますかという話になったのですが、そのときに既存のリーダーの方も実は新しい取り組みを悪いとは思っていないのです。ただ、これまでの関係の中で素直にうんと言えないだけという話なので、そこに新しい人的支援みたいな、応援隊みたいなものが入る中で、あいつが言うんだったらしようがないなとか、どこかで言い訳をつくってあげるといえるのでしょうか、既存のリーダーの方々にあいつはわけわからないのを仕掛けるんだから、そこは目をつぶっていこうみたいな言い訳をつくるというところの中の、いわゆる従来の人間関係を変えているみたいなどころも実は外部の方々が生かされるところだと思うのです。

ですから、中の人では悪いというわけではないですけども、中の人はいわゆる小学校のときから鼻たれ坊主でけんかばかりやったとか、その状況も全部わかっている中で支援と、それを全然知らない中で、藤先生おっしゃったような風を入れていく、あるいは水を注ぐというような役割があるのではないかと思いますので、このリーダーの方が悪いというわけではないですけども、新しいリーダーシップをつくっていくことに重点を置くのがいいのではないかと思います。

○葛尾村 もう一つ質問があるのですけれども、既存の村の特に若い人がそういったものに参加するというのは、なかなか厳しい状況にあって、そういうものをどういうふうにやっていたらうまくいけるのかという質問なのですけれども。

○稲垣氏 それは難しいことは確かです。というのはやはり子育てだとか仕事という日常があるわけですから、それを地域づくりまでというところは正直、難しいかなと思うのですが、ただ、今の状況であると何かしたいというのはふつふつと思っていらっしゃるところは間違いなくあるみたいだけれども、それをどうにかかわったらいいのかわからない。特に既存の従来のものでづくりだとかまちづくりという話になると、やはり既存の方々がいらっしゃいますから、それに新たにかかわることは難しいなと考える方もいらっしゃるのでしょうけれども、これも外部の若者が入ってくる中で刺激をされて、変わっていくということは事例としてありますので、その外部の刺激あるいはよその人がこんなに俺らの町のことを考えてくれるんだみたいな、そういう接点があると変わってくるのだらうなと思います。

それから、この会議の場ではふさわしい発言かどうかはわかりませんが、若い女性が支援員が入ると、若い男性はそれだけの不純な動機で村づくりにかかわることもありますから、これはあまり発言しないほうがよかったかもしれない。

○葛尾村 ありがとうございます。

○浪江町 浪江町の佐藤です。どうもお疲れ様です。

私からはまず意見といいますか、生々しい話ではないのですけれども、やはり復興公営

住宅が目の前に迫ってくるというのは来年の後半か再来年になってくると思うのですが、現実的に考えていかなければいけないものは先ほどお話があったとおり、魅力ある公営住宅にしてほしい。その最初の手始めとして先ほどお話があったように町村単位の統合といえますか、さらには前回お話があったように高齢者なんかの対応するのは保護施設みたいなものを作って当然。と同時に、復興公営住宅ができてからも応急仮設住宅、借り上げ、仮設住宅など起こると思うのです。その辺をどういうふう整理していくのかというのがあるかと思うのです。ただ単純に全てこちらに設置したのでどうぞというわけにはいかないと思うので、表現があれなのですけれども、魅力ある復興住宅をまずはつくっていただきたいというのが1つ。

先生にお聞きしたいのは、現状、今は郡内で申しわけないのですけれども、双葉郡のように29年3月まで移住を決めた町村からすれば、今のところ他力本願な部分がありまして、復興住宅もそうですし、浪江の場合ですと和歌山県以外46都道府県に避難しています。一度も浪江町のほうに復興住宅ができてからの部分というのはいろいろ方法はあるのかなと思うのですけれども、そこまでつなぐ県外のほうの支援を、浪江町の場合ですと今、5カ所のほうに支援員を配置しているのですけれども、なかなか集まってくださいと言うだけでは難しく、まずは集まってもらえれば情報提供であるとか顔を見てお話できるというのはあるのですけれども、そういう部分のいわゆる今までの経験といいますか、そういうものでどういうふうな方法があるのかなというのを御教示いただければと思います。

○稲垣氏 御教示というよりも、むしろ浪江の方からこの前勉強させていただいた話なのですけれども、1つは先ほどの復興住宅の話は、本来であれば町とかアイデンティティが共通のところがあるような方々が一緒になるのが一番だろうと思うのです。なかなか難しいとは思いますが、やはりそれがいいのだろうと感じます。

そういう中でもう一つは、復興公営住宅で1つはもしかしたら、言い方は悪いですが、本当に弱者だけが集まってしまうという話になると、コミュニティどころでない話になりますので、ある種、公の支援で支え続けなければいけない話になりますので、そういったところにも若い世代が入っていくというバランスみたいなものは大事なだろうと思うのですけれども、ただ、それをどうやって決めていくのかというのは非常に複雑な方程式で、これは本当に皆さん方が御苦労されている点かなというふうには理解していますとしか答えができないところです。

もう一つは、先ほども県外の人たちをどうつないでいくかという話、これも一軒一軒訪ねるとか、そういう世界で浪江の方はやられていますので、これは続けていくというか、何でしょうね、ちゃんと我々は見えていますよという目線を送ることが何よりも町民の方々にとって非常に安心があるのだろうと思いますので、見ていてくれるんだという、実は過疎の話もそうでした、見ていてくれるんだというだけでも安心する過疎の集落の方々がいっぱいいますから、我々も忘れられていないというメッセージを伝えるだけでも十分なのだろうと思います。

ただ、一方でどこかに浪江の拠点というか、ここに最終的には浪江のほうに戻ってという拠点が最終ということになるのでしょうかけれども、中間でもどこか拠点みたいなものがある、あそこに行けば浪江を感じられるとか、あそこに行けば浪江の人たちに会えるとか、あそこに行けばあのときを思い出せるとかいうところも、その核となるような場所なのか人なのか仕組みなのかはあったほうがわかりやすいのではないかと。そこに旗が立っているということがすごく大事なのではないかと。

すみません、全然お答えになっていないと思いますけれども、ありがとうございます。
○双葉町 双葉町の山本です。よろしくお願いします。

稲垣先生にお伺いしたいのですが、これから復興公営住宅が整備されていきますと、そこがコミュニティの中心地になっていくのだけれども、ただ、相変わらず仮設は残っていくのではないかと思います。そうすると、借りに現在いる方もおりますし、仮設、借りに、復興公営住宅それぞれの連携と申しますか、コミュニティ維持とか、それから、復興公営住宅を中心と申しましたが、その地域の方、要するにいわきならいわきの地域の方々のコミュニティをいかに図るのかということがだんだん問われてくるのかなと思います。そこをどういうふうに乗っけていけばいいのかということが1点と、あとは現在もそうなのですが、何かの集まりとか申しますと、女性が中心で、先生の資料もごらんになるとあれなのですが、男性がほとんどいないというところで、どういうふうな仕組みをつくって男性をコミュニティの中に入れるということの2点を御教示いただければと思います。

○稲垣氏 非常に難しい問題ですけれども、私なんかはお答えする立場ではないのだと思うのですが、1つ参考になる点は、先ほど地域住民とのかかわり合い、1つ目の質問なのですが、これはもちろん賛否両論あるかもしれませんが、私たちもある種震災あるいは事故当初は自主避難と言われる方々、それから、強制避難とされる方々、これは事情が違うという中で、やはり一緒に支援するといろんな意味で摩擦があるということで、多少、事情が違う人を分けて支援をしていったのですが、最近はずっと、そこから辺のお互いの事情をわかってもらうような話し合いを繰り返し、そういう場をつくるようにしています。

そういう中で話せばわかるというか、理解するというようなところというのは実際にあるのではないかと。あまりにも我々が危惧し過ぎのところがあって、そこは準備だけでやっていたところは難しいかもしれないけれども、何かしらの、そういった支える方々とともに、例えばいわきと復興住宅に住まれる方々とのそういった話し合いの場とか、お互いの立場を理解し合えるような取り組みというのは、繰り返しやれば変わっていくのではないかと申すことは実感としてあるということでございます。

男性に関しては、これは妙案はないです。正直なところ。やはりこれまでの自分たちが培ってきた土地と家と仕事と、これなのです。やはり男性の方なんかは。それに近いようなことをどう真似てやるかということなのでしょうけれども、なかなかこれは妙案がない

というのが実は本音のところですよ。

ただ、先ほどの記録誌だとか、あるいは神様を持ってくるとか、ああいうところには男性の方々は非常に協力をしてもらった記憶がありますので、サロン、人が集まるというよりも、そこに炊き出しでも男性のかかわりだとか役割だとか、あるいはそういう希望はあるのだらうと思いますので、そんなところを繰り返しやっていただく。記録誌だとか歴史みたいなのところは、非常に実は男性は敏感に感じていただいているのではないかと思います。

○大熊町 大熊町の永井と申します。よろしくお願ひいたします。

藤先生にお伺ひしたいのですが、先生の御両親が奄美大島出身で、鹿児島で藤先生がお生まれになって、その鹿児島では大熊町。

○藤氏 奄美大島は大熊町です。

○大熊町 大熊会というのが、ちょっと名前があれだったので、今も集まりが行われていると聞いたのですが、私どもの大熊町に関しましては現在も帰宅困難区域が大部分であって、5年から先の見通しも現在もずっと立っていない。やはり県外も含めて戻らない選択をした方が大部分になってしまうのかなと思います。

それで私たちのほうで考えるコミュニティの部分なのですが、もちろん復興公営住宅を中心としたコミュニティも大切ではあるのですが、先生の御両親の出身の大熊会のような県外であり、福島のように大熊町出身のコミュニティというもの、そこに集まるというか、出身者、OBという表現はよろしくないかと思うのですが、そういった意味合いでのコミュニティが今後存在するようになるのかなど。もしくはそれを維持して大熊町出身だという意識だけ、そこに誇りを持てるようなコミュニティの存続を考えていかなければならないのかなど。実際の生活ではなくて意識の問題でのコミュニティの意識を考えていかなければならないかと思うのですが、前置きが長くて内容は単純な話なのですが、そのコミュニティの存続というか、盛り上がりといったものにはどういった要素が必要になるかというのをお教えいただければと。御両親の大熊会を参考ですみません。

○藤氏 大熊というのは奄美大島にある南西に位置するのです。今も大熊会をやっているかどうか分からないのですが、子供のころは非常に盛り上がっていました。

先ほどの新潟のお話でもあったみたいに、アイデンティティという話でいくのか、いろいろな捉え方があると思うのですが、私の記憶の中の話で最初にしたときに、やはり地域の音楽とおいと味というのは私自身にすごく染みついたものですし、本当はだからそれはどういうものが大熊のほうにあるかわからないのですが、味というのが一番実は感覚の中で人間の感覚で一番敏感なわかりやすいものなのです。記憶もしやすいものですし、味の感覚というのは非常に重要だと思っているのですが、何か1つの地域を象徴するような味がもしかしたらあるかもしれない。もしくは伝統行事、祭りみたいなものですね。

そういうものを記憶として、またここでこういう話をするのは変な話になるかもしれな

いですが、こういう技術とか芸術の話をするると必ず出てくるのは記憶と記録の話でして、記録が記憶をつくっていくという、実は記憶というのは記録によって捏造されるという話もありまして、皆さんある程度年代をとっていくと、皆さん子供のころみんな実はいじめっ子とか、みんなのボスだったとか、ある年代以上の人はみんな知らないうちにビートルズのファンになっていたりとか、ある年代の人たちはみんな美空ひばりのファンになっていたりとか、若いころはそうでもなかったのだけれども、だんだん記憶が捏造されていくみたいなことというのがあると思うのですが、何かそういうものの記録をつくっていくということ、もしくはデモンストレーションをつくっていくことが、あるリアルな感覚をつくっていくということになっていくのではないかと。

例えば町なか、どこかわかりませんが、そこにある大熊のレストランをつくるであるとか、居酒屋大熊をつくるであるとか、そこでどんどんやっていくと大熊というものがそこにレコードされていく、記録されていく。そこに味と音と祭りがあり、そこがどういふものなのか私もよくわからないのですけれども、そこでそういうものがつくられていくというか、逆にそういうものが増幅されていくような仕掛けというものはあるのではないかと。そういうものに興味を持つ人がいれば一番よくて、そこで若い人たちがネットを使いながら新しい感覚で新しい表現をしていくとか、あたらしい活動がその中で離れているからこそというか、できていくようなものができていかなないのかなと感じております。

先ほど女性が集まるという話がありましたけれども、やはり味について女性は強いので、特にコミュニティの中でいろんな料理をしたりとか、食事をあれしたりとか、そういうコミュニティレストランみたいなものをつくったりというのも、どうしても女性が中心になってやっていく面もあるのですが、私自身は実は男性の役割というのは、パプアニューギニアの場合、引き続きずっと監視していることですのでけれども、祭りの道具をつくったりとか、船をつくったりとか、仕事の何かをつくるという、うちのじいさんは船大工だったのでけれども、そういう技術というのは実は男性に託されたものが多くて、そういうものをつくっていく場というものがあれば、実は、私はだからそういう意味で言うと復興住宅にはそういう木工房が要るのではないかと、もしくはその地域に何か、もちろん畑とかでもいいですけれども、何かそういうものをつくっていける場、福島は塗の地域でもありますから、漆なんかいろいろありますけれども、塗装が何かできる場所であるとか、何か見分ける場所であるとか、そういう生活もしくは祭事の道具をつくっていくような、そういう活動をつくっていくことでネットワークをつくっていくとか、そういう場をつくっていく。そういう可能性というのものもあるのではないかと。そうやって離れていったものを何かつないでいながら、新しい活動をつくっていくことを楽しんでいくということができればおもしろいのではないかと思います。

プラス・アーツのときに防災のプログラムをいろいろ考えながらやっていく中ですごく重要だった点というのが、やはり災害は非常に厳しい現実、大変なことだけれども、防災のプログラムが大変だったら誰も寄ってこないという話をしています、防災のプログラ

ムは正しくなければいけないということをプラス・アーツはやっておりました。だからこそいろんな人たちが興味を持って楽しく参加する。そこに防災の基礎的な知識を身につけていく。復興元のコミュニティの作り方についてももしかしたらそうかもしれない。実は現実はずごく厳しくて大変な問題なのだけれども、その中で大変だ大変だと言ってやっても誰もついてこないし、そこから何もおもしろいものは出てこないのではないかと感じておまして、もしかしたらコミュニティをつくっていく、復興していくということは楽しい気持ちにチェンジして、厳しいからこそ何か魅力をつくっていかなければいけないのではないかとこのように感じております。

私が最近興味があるのは、十和田にいるものですから馬なのです。乗馬。馬を育てるのはどうでしょうみたいな。馬にまつわって発電するとか畑をつくるとか、馬との生活をすることによって何か、もともとお恐らく十和田はそうですけれども、東北は人間中心の社会ではなくて、馬を中心とした生活をしていたことがありまして、それが東北の中には非常に染みついているのではないかと思うのですけれども、皆さんの地域はどうかかわらないのですが、馬とともに暮らすことによって派生するいろんな発電であるとか肥料であるとか暮らしぶりであるとか新しいエネルギーを考えることであるとか、例えばそういうツールを何か持ってくることで、男性の役割というものもいろいろ出てくるのではないかと感じておりました。

○川内村 川内村の永澤です。

稲垣先生にお伺いしたいのですが、川内村で避難している方は郡山市が一番多いのですけれども、1,000人以上避難しているのですが、その中でも応急仮設住宅に住んでいる高齢者の問題がありまして、この方は災害公営住宅とかに入る方ではなくて、自宅にすぐ帰れる方なのですけれども、週の内何回かは戻って来るのですけれども、いまだに帰ってこないのです。その理由として非常に郡山が便利だということもあるのですが、コミュニティができていて非常に居心地がいいと言うのです。応急仮設なので住み心地は悪いのだけれども、居心地がいい。その事情としては川内村は広くて高齢者が離れたところに一人一人点在している。ですけれども、応急仮設はおはようございませうと言うと隣ぐらいで顔が見えて、ラジオ体操とかも一緒にできますし、茶道も一緒にできる。非常にいい。だからこの制度がある限りはここにいますけれどもというのが住民懇談会とかをやるとそういう話が出るのですけれども、村としては行政的な話なのですが、応急仮設住宅というハード上の問題もあるので、いつまでも入れない。将来的に村へ戻って来てもらうしかない、高齢者なのでないでしょうという中で、部落としては高齢者専用の住宅をつくって、近いところに住んでもらうという行政的な発想があるのですけれども、これは先生等から何かお知恵があれば、お知恵を貸していただきたい。戻ってきた際の仕掛けといいますか、そこら辺について何かアイデアがあればお願いしたいということです。

○稲垣氏 難しい問題です。

1つは山古志なんかもそういうときが一時ありました。文化住宅だと言っていましたね。

仮設住宅を見たときに。一回転べばどの電化製品のスイッチ押せるかなみたいな話で、おっしゃるとおり確かなのですけれども、それは冗談として、1つはそのいわゆる距離感とか便利さみたいなものを川内に全部そっくり持ち込むことは難しいと思うのですけれども、それに近いことはいろんなソフトな仕組みでできるかなと思うことはあります。ですから山古志の場合だと、たまたまなのですけれども、路線バスがなくなったのです。それで住民が96%ぐらい出資をしたNPO法人が今、バスを走らせて、実は当時のバスよりももう少し柔軟に、手を挙げたら乗せてくれるとか、電話すればどこまで迎えに来てくれるというようなことをやって、そういうものでお医者さんとか、人の集まる場所を1つに集約しながら、そこにはいつでも行けるというような感じになったのです。それは形は違うのですけれども、非常に近い形になるかもしれないなど。

ただ、それは1つそういったことを持ち込むということが大事なのだろうし、もう一つはどちらにいたときにでも、要するに川内村の誇りとか、お一人お一人の誇りみたいなところにアプローチすることは大事なのではないかと思うのです。便利さもそうなのでしょうけれども、やはり今まで住んでいた町、村の誇りみたいなものを取り戻す。そういうようなことの中で例えば川内村の郷土料理だとか、そういうものにどちらに出ている方にもかかわっていただく。そういう場面をつくっていただく。それだけで川内村のよさみたいなことを思い起こしていただいて、長期的には戻ってこようかなという雰囲気づくりをつくっていくということは非常に大事なのではないかと、多分誇りを持たれていると思いますので、ただ、便利さがいいという話だけではないのだと思うのです。だから戻りたいのだろうと思うのです。よしこれで戻ろうという、そんなようなことの思いをつくってあげるようなアプローチがあると違うのではないかと思います。

○富岡町 富岡町の三瓶と申します。

私からは2点ほどありまして、まず先ほど木村参事官から稲垣先生に御質問された際に、仮設住宅の方が最初に出ていくというような趣旨の御質問をされたと思うのですが、現行の制度から言うと仮設住宅とか借り上げ住宅というのは同じ制度の上から成り立っているものでして、これはどちらか一方終わらせるようなことというのは、前に安齋次長さんが郡山に来られたときにも私からお話をさせていただいたのですけれども、そういったことは少し難しいのではないかと思うのです。というのは、借り上げ住宅だからご自宅に入れないということは説明がつきづらいなということが、先ほどお話を聞いていて思いました。

○復興庁 全然、そういうお話をしたつもりではないですが。

○富岡町 それはないというお話ですね。そういう御質問が1つでした。

○福島県 全くイーブンですので。

○富岡町 確認をさせていただきました。

○福島県 そういう御趣旨ではないです。

○富岡町 発言ではないですよという私からの確認でした。すみません。

もう一つ、コミュニティ研究会ということでしたので、復興住宅の建設に伴ってという

ことで、先ほど稲垣先生からも地域誌とか神社の移転というときには男性の方が大変御尽力をされたというお話がありまして、この間、樵局長さんのほうとも、私は広野のほうで双葉ワールドをやったときにお会いしまして、県知事さんをお連れいただいたのですけれども、この間の催しを見ていると地域移行を根差してきた人たちが、例えば浪江町さんとか大熊町さんも結構前にやっていたりですとか、私たちも地元のお祭りなんかを披露する場面を展示していたりしたのですけれども、そういったものの拠点施設というのは、やはり町外に復興住宅を整備するに当たっては必要になってくるのではないかとすることは私個人としては今、思うのですけれども、この辺はコミュニティの復活交付金ということで、例えば災害公営住宅整備に伴って埋文の調査は交付金の中で可能だということなのですから、今後こういったものの補整費などもあり得る話なのではないかと考えています。これは木村参事官さんに御質問という形でも大丈夫ですか。

○復興庁 コミュニティ復活交付金は避難者支援事業の実施も可能となっています。ハード整備に関連するソフト事業であるとか、例えば補助メニューにないハード整備なども含め、帰還事業の35%を上限に交付できる仕組みにしていますので、それは我々としては地元なり現場の御要望に応じていろいろ御相談にのっていきたくて考えています。使い勝手がいいようにしていきたいと思えます。

○檜葉町 檜葉町の末永と申します。

稲垣さんに1点だけ御質問なのですけれども、檜葉町は全町が帰還を目指しているということで、7,500人余りの人がこれからできるだけ早い時期に帰還しようという取り組みにしているわけなのですが、一方これはいわき市にかなり大多数の方がいるという中で、いざ戻ったときにやはり戻らないという人もかなりいるのではなかろうかと想像しているのですが、この新潟での事例の中で、例えば山古志等も含めてなのですから、戻った人、戻らない人いると思うのですが、戻らなかった人が例えば今の想像では以前よりは都会に住んでいるという方が多くて、便利であるということもあって、その地域に溶け込んでいくというのが普通に考えられるわけなのですが、それとは違った姿が帰還をしている中で見受けられたような事例があれば、御紹介いただけないかと思っております。こういう形で戻っていったとか、そういう例がありましたら。

○稲垣氏 戻っていったという事例は、まあある種一回選択したら実はそんなに動いていないというのが本当のところだと思います。当時よりも便利なところに移っているということが一般的でして、やはり学校の教育の問題だとか、母親の介護の問題だとかいうことで、町場におりてくる方々は多いはずですが、ただ、思いっきり町の中に行っているかという、そうではなくて、実は山古志の方々が一番多いのは車で20分ぐらいおりたところなんです。そこに非常に多くいらっしゃいます。かなりの方々は毎日通って農業をやっています。ですから昼間は世帯が減ったと感ぜない集落もあるようです。ただ、実はこれで運転ができなくなると厳しいなという問題が実は裏腹にあるのですけれども、それでも一つ、今の質問とはずれる話なのですが、お話しておきたいのは、これは中越でも村から出てい

く、村に戻るといふ2つの選択をされているのですけれども、出ていった方と戻った方の関係がいい集落と悪い集落があります。いい集落というのは、おおよく来たな、お茶飲んでいけ、寄ってけという話です。あるいは祭りになったらお前来たよと。道普請は下手すれば来たよと、区費も払えよみたいな、そんなことの間接をやっているところと、もう一方は実は来てよよそよそしい。声もかけにくい。来ているのはわかるけれどもということなのです。ある人に聞きましたら、離婚した夫婦みたいなものだとおっしゃっていましたが、非常に微妙な距離感ということをおっしゃっています。

これの大きな差は何か。どうも見えてきたのはいわゆる仮設だとか避難中に出る出ないという悩みながら考えるわけです。出る出ないことを悩んでいる、どうしようどうしようということをつまらぬ場所で、インフォーマルな場所でもみんなでコミュニティ単位で話せたかとかです。ですから結果出る出ないが決まって、蓋をあけたときにいい関係を保っているところは、蓋をあけたときにあいつは出るんだな。しょうがないよなと納得できたという話ですね。ただ、関係がうまくいっていないところは、蓋をあけたらあいつも出るのか、こいつも出るのかというふうにびっくりしてしまったというところがあって、ですから避難中の模索とか悩みということを通して、みんなで理解し合いながらやってきたところと、全くそれができていないところでは、実は出た人と戻った人の関係は大きく違うということが、9年たって見えてきた我々の様子でございます。

お返事になっていないかもしれませんが、お答えさせていただきます。

○司会 ありがとうございます。

すみません、順番にということでお聞きしておりましたが、時間が超過してしまいましたので、どうしてもこの場で御質問をお聞きしたいということがある自治体さんから、もう一つ、2つお聞きしたいと思います。ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

すみません、途中で質問が終わるような形になり恐縮ですが、最後に長期避難者の生活拠点形成のためのコミュニティ研究会の今後の進め方というペーパーがございます。こちらを簡単に御説明したいと思います。

○復興庁 それでは、今後の進め方の1枚紙です。当初この研究会がスタートしたときは年内取りまとめというスケジュール感で、皆様にもそういう御説明をしてきましたが、これまで有識者の方々のヒアリングをいただいて、我々としてはいろいろな知見が蓄積され、非常に参考になるということで、ヒアリングを増やしたいという希望が事務方からも出てきました。皆さんもさらにいろいろ専門家からお聞きしたいことが多いのではなかろうかと思えます。そこで、ヒアリングを少し追加いたしまして、全体のスケジュールを年度末まで3カ月ほど延ばしてはどうかという御提案をさせていただきます。

復興公営住宅の話をお先ほどからしていますけれども、恐らく募集が来年度当初ぐらいでしょうか。それに向けてまだ時間的な余裕もあるということも含めて、少し時期をずらしたいということです。

ここに書いてありますとおり、今日まで4回実施してまいりまして、次回5回目が特に

広域的なコミュニティ維持ということで、イベントとかICT利活用の専門家に交渉中でございます。12月に開催したいと思っています。

もう一回追加したのは、第6回目は1月に予定しておりますけれども、過去の災害時における良好なコミュニティ確保と書いてあります。これは今日も稲垣さんから長野の中越地震の事例をお聞きしましたが、次は交渉中なのですけれども、三宅島の方にお越しただく予定です。三宅島は皆さん御案内のとおり4年半ほど東京都内に全島避難されて、その後、お戻りになった経験があるということもありまして、三宅島の関係者の方に当時の都内に避難された際のコミュニティ活動、帰還に向けての苦労話を含めて少しお話をお聞きしたいと思っています。

その後、我々担当者だけで1～2回取りまとめのための議論をしたいと思います。

右側に追加と書いてありますけれども、あとは有識者の個別ヒアリングですね。お呼びするというスタイルではなくて、我々が聞きに行く。担当者が。そういうスタイルは引き続き続けたいと思っていますので、これは我々事務局が行きますけれども、各市町村の方々と同行したいという方がいれば、もちろん歓迎でございますそれを並行して進めながら、3月の取りまとめに向けてということで再セットしたいと思います。

特に御異論がなければこれで進めたいと思いますが、何か御意見なり、もう少し早くしてほしいという要望などがあればどうぞ。よろしいでしょうか。では、こういう形で今度12月、1月とあと2回ほどヒアリングをさせていただいて、その後、年度末に向けて取りまとめということにしたいと思います。

以上です。

○司会 ありがとうございます。

それでは、第4回「コミュニティ研究会」はこれで終わりたいと思います。

次回第5回は12月開催予定ということで、また日程等は改めて御案内させていただきます。

本日はどうもありがとうございました。